

日本の食が危ない

写真は文藝春秋4月号緊急特集、鈴木宣弘・東京大学大学院教授の「日本の食が危ない!」。低迷する自給率、対米従属の安全基準—このままでは国民が飢え死にする!と警告を発する。冒頭部分を抜粋して紹介する。

食料品の高騰は一時的な現象ではない。今、世界の食料は「クワトロ・ショック」(クワトロとはイタリ語で4)と筆者が呼ぶ4つの危機に見舞われているのだ。①コロナ禍による物流の停滞。②中国による食料の「爆買い」。③異常気象による世界的な不作。④ウクライナ戦争の勃発。



これらによる打撃を最も受けると予想されているのが、日本なのである。なぜなら日本は先進国の中でもとりわけ食料自給率が低い国だからである。日本の自給率は戦後一貫して低下し、カロリーベースで38%しかない。品目別に重量ベースで見ても主食のコメは98%、鶏卵は97%あるが、大豆は7%、小麦は17%、牛肉は38%と、非常に低い自給率となっている。しかもこれらの自給率は、いわば「ゲタを履いた」数字である。なぜなら農業に欠かせない肥料や、畜産飼料用の穀物(トウモロコシなど)の大部分を海外からの輸入に頼っているためだ。もし肥料や飼料を輸入できなくなったら、日本人は深刻な飢餓に見舞われてしまう。

日本が直面しているのは自給率という「量」の問題だけではない。食料の「質」という面でも、懸念がある。例えば「遺伝子組み換え作物」(GM作物)がアメリカなどから大量に輸入され、「ゲノム編集食品」が日本国内でも積極的に生産されている。これらバイオ技術を駆使して誕生した作物や食品は、長期的に人体や生態系にどのような影響を与えるかについて、誰もわからない。さらに、特定の農薬に耐性をもつGM作物と農薬はセットで農家に販売されることが多いが、農薬には発がん性リスクの指摘もあり、アメリカではメーカーに対して巨額の損害賠償訴訟が次々に起こされた。フランスなど西欧諸国では、GM作物については厳しい基準で管理されている。危険なのは農作物ばかりではない。早く飼育させるためにホルモン剤等を投与された畜産物も日本の食卓に入ってきている。

今、食をめぐる私たち日本人はどのような危機に直面しているのか、そして危機を脱するために何をすべきなのか—この機会にじっくり考えてみたい。

以下の項目は、

1. 有事の際は餓死者も! 世界が「食料困り込み」する中、一人負けの日本
2. 国内農家に「コメつくるな、牛殺せ」は亡国の道
3. 米国が押しつける遺伝子組み換え作物、ホルモン牛肉 日本は農薬天国
4. 家庭菜園、学校給食 消費者と生産者の垣根をなくそう 持続可能な農業にこそ活路

(2023年3月26日)